同志社大学 良心学研究センター主催 公開シンポジウム

歴史を振り返ることの意義

― 同志社創立 150 周年を見据えて ―

(連続シンポジウム「同志社 150 年の歴史から展望する未来への挑戦」第 1 回)

同志社の歴史は激動の近現代史を色濃く反映しており、私たちが立っている場所には先人たちの苦労の足跡が連なっています。また、適切な歴史認識は未来を展望する力を与えてくれます。今後、同志社がその精神をいかんなく発揮するために、なぜ歴史を振り返る必要があるのかを共に考えたいと思います。

- 日時：2024 年 3 月 4 日（月）17:00～19:00
- 場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 RY103

  & Zoom ウェビナー
- 講演：

小原 克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）

「同志社精神 150 年史の展望」

林田 明（同志社大学 理工学部 教授）

「同志社前史（1843～1874）」

パネリスト：沖田行司（本学名誉教授）、木原活信（社会学部教授）、和田喜彦（経済学部教授）、川嶋四郎（法学部教授）、中村信博（同志社女子大学 学芸学部 特別任用教授）、神田朋美（神学研究科後期課程学生）

■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail : rc-csc@mail.doshisha.ac.jp http://ryoshin.doshisha.ac.jp

良心を世界に―良心を覚醒させる知の連携と知の実践

講 師 略 歴

小原克博（こはら かつひろ）

1965 年、大阪生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士（神学）。現在、同志社大学神学部教授、神学部長・神学研究科長、良心学研究センター長。日本宗教学会 常務理事、日本基督教学会 理事、宗教倫理学会 評議員も務める。日本学術振興会 学術システム研究センター プログラムオフィサー（専門研究員）（2018-21 年）、宗教倫理学会 会長（2016-18 年）、京都民医連中央病院 倫理委員会 委員長（2003-09 年、2010-18 年）、同志社大学 一神教学際研究センター長（2010-2015 年）、京都・宗教系大学院連合 議長（2013-2015 年）等を歴任。

専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治およびビジネス（経済活動）との関係、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論などに取り組む。神道および仏教をはじめとする日本の諸宗教との対話の経験も長い。

単著として『ビジネス教養として知っておきたい 世界を読み解く「宗教」入門』（日本実業出版社、2018 年）、『一神教とは何か――キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』（平凡社新書、2018 年）、『宗教のポリティクス――日本社会と一神教世界の邂逅』（晃洋書房、2010 年）、『神のドラマトゥルギー――自然・宗教・歴史・身体を舞台として』（教文館、2002 年）、共著として、島薗進ほか『徹底討論 ！ 問われる宗教と“カルト”』(NHK 出版新書、2023 年)、山極寿一・小原克博『人類の起源、宗教の誕生――ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』（平凡社新書、2019 年）などがある。

林田　明（はやしだ あきら）

同志社大学理工学部環境システム学科教授。博士課程教育リーディング・プログラム「グローバル・リソース・マネジメント」アシスタント・プログラム・ コーディネーター（2014 年度～現在）。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。

研究分野は地球システム科学、古地磁気学・岩石磁気学。岩石や地層に記録された過去の地球磁場の復元とそれを利用した年代推定や地殻変動・環境変動の解析。特に最近は、深海底や湖底, 陸上の堆積物の磁気特性を指標として、気候変化や古地理の復元、人間活動の影響の検出に関する研究などを行っている。

最近の論文として、“Beppu Bay, Japan, as a candidate Global Boundaries Stratotype Section and Point for an Anthropocene series” The Anthropocene Review, Vol. 10, 49–86, 2022 年;“宍道湖西岸で採取された完新世堆積物(HK19 コア)の残留磁化と磁気特性:汽水域の古環境復元への示唆” Laguna(汽水域研究), Vol. 29, 75–86, 2022 年（いずれも共著）などがある。著書（分担執筆）として、同志社大学良心学研究センター編『良心から科学を考える――パンデミック時代への視座』岩波書店, 2021 年;同志社大学良心学研究センター編『良心学入門』岩波書店, 2018 年、新島襄と地質学に関する論説として、「新島襄の地球 ―江戸・アーモスト・京都―」同志社社史資料センター・同志社大学地学研究会(編)『新島襄が感じた地球』所収, 2017 年がある。

同志社精神 150 年史の展望

小原克博

連続シンポジウムの趣旨

「同志社は 2025 年に創立 150 周年を迎えます。同志社の歴史は激動の近現代史を色濃く反映しています。同志社史を同時代史の中に位置づけながら、同志社の 150 年を日本や世界の 150 年と共に振り返っていきます。その際、歴史的な出来事だけでなく、それぞれの時代の精神に着目します。適切な歴史認識は未来を展望する力を与えてくれます。同志社 150 年の歴史を振り返りながら、同志社が現在担うべき課題を明確にし、さらに同志社 200 年を見据えたビジョンを考えていくために、公開シンポジウム・シリーズ「同志社 150 年の歴史から展望する未来への挑戦」を始めました。」
https://ryoshin.doshisha.ac.jp/jp/activity/20240304/

同志社精神 150 年史のねらい

1.『同志社１５０年史』と『同志社精神１５０年史』の違い
2. 事例としての「良心」(conscience)
・西洋史における conscience（共に知る）
・アメリカ史における conscience：良心的兵役拒否、社会的合意形成の力としての良心
・近代日本史における（conscience の訳語としての）「良心」:『孟子』から取られた。儒教の影響。
・現代および未来における「良心」(conscience)
「良心を世界に―良心を覚醒させる知の連携と知の実践」（良心学研究センターのキーコンセプト）
「対立する価値をとりなす能力としての良心」
「情動的良心」「認知的良心」
「切る力（disjunctive power）としての良心」「つなぐ力（conjunctive power）としての良心」
「未来世代と共に知る良心」「人工物（AI・ロボット）と共に知る良心」「大地と共に知る良心」
【参考】良心学研究センター編『同志社精神を考えるために』2023 年、94-102 頁「良心」

連続シンポジウムの予定

◎第１回、2024 年３月４日

１．同志社前史（1843～1874）

１）新島の向学心
２）岩倉欧米使節団の教育調査
３）帰国

◎第２回、2024 年６月３日

２．同志社創立（1875～1890）

１）京都府の干渉・アメリカンボードとの軋轢
２）私学抑制政策
３）「学校令」と同志社
４）新島の同志社大学設立運動

◎第３回、2024 年９月

３．新島没後の混乱期（1891～1911）

１）「訓令 12 号」と同志社――「宗教と教育の衝突」論争の時代

２）「同志社綱領」問題（横井時雄）

３）自由主義神学がもたらした混乱と対立

４）キリスト教社会福祉の源流――「同志社派」の誕生

４．同志社諸学校の発展（1912～1929）

１）大正デモクラシーと同志社

２）原田助総長と国際主義の始動

◎第４回、2024 年 12 月

５．戦時下の同志社（1930~1945）

１）同志社の国際交流

２）軍部の台頭とファシズム

３）配属将校の介入と右翼の台頭

４）総力戦体制下の同志社

◎第５回、2025 年３月

６．同志社の再建（1945～1960）

１）終戦と同志社

２）新制大学と同志社の学校改革

７．学生運動と大学改革（1961～1980）

１）学生自治会運動

２）大学封鎖・自主講座

３）田辺移転と大同志社構想

◎第６回、2025 年６月

８．二校地問題と大学の大衆化（1981～2003）

１）田辺校地（実験系）・今出川校地（文系）

２）大学設置基準の大綱化（1991 年）の影響

９．新設学部の展開（2004～現在）

１）新設学部の理念

２）幻の医学部設置構想

３）同志社教育理念の再考

同志社および世界の未来を考えるために

現在の単純な延長ではない未来を構想するためには、現在の社会情勢を分析するだけでなく、長期的な視点で過去を振り返り、未来世代や未来社会に対する責任意識を喚起する必要がある。歴史を批判的かつ俯瞰的に振る返ることは、〈新しい未来〉を創造するために欠かせない。

同志社前史（1843～1874）

林田 明

今出川キャンパスに立つ明徳館の名前は儒教の経書の一つ、『大学』から採られたものであり、その壁にはヨハネによる福音書の一節“VERITAS LIBERABIT VOS”（真理はあなたたちを自由にする）、そして上海からボストンまで新島を運んだワイルド・ローヴァー号のタブレットが飾られている。また、京田辺キャンパスのラーネッド記念図書館やデイヴィス記念館は、新島とともに草創期の同志社を支えた宣教師の名が付けられている。このような光景を目にするとき、あるいはキリスト教やリベラルアーツを重視する同志社のカリキュラムを体験するとき、意識するとしないとにかかわらず、私たちは同志社の歴史の中に生きているのである。同志社の精神史（intellectual history）を振り返ることは、単にそのルーツに対する興味のためだけでなく、現在の同志社を理解し、未来を考えることに繋がるものではないだろうか。

ここでは新島襄の生誕から同志社英学校開校の前年までの時期を取り上げる。この間のペリー来航やプチャーチン来航の衝撃、明治維新という政治・社会体制の大変革に対して、若き新島はどのように反応したのか、その過程から今の同志社に繋がる課題を考えることにしたい。

1. 向学心の高まり

- 天保 14（1843）年、安中藩江戸屋敷に生まれた新島は、武士の子として漢学や儒学を学び、中国古典の素養を身につけた。しかし、当時の青年の多くがそうであったように、蘭学に惹かれるようになった。幕府の軍艦操練所で測量のための数学や航海術を学び、さらに英学（英語の書物や英米人を通してもたらされた西洋の学術）に興味を広げた。
- 新島の向学心の高まりには、嘉永 6（1853）年から安政年間にかけてのペリー来航やプチャーチン来航の衝撃が関係していた。新島の心情は、「今にして学ばずんば時を失わんことを恐る」という家老・尾崎直紀宛の手紙（1858 年）の一節によく表れている。
- 新島襄の脱国の動機、そして同志社創立の背景には、社会情勢の変化と結びついた向学心の高まりがあったと言える。また、新島襄の漢学の素養は同志社創立後の活動にも生かされており、キリスト教の精神とともに現在の同志社の校風を多層的で奥深いものにしているようである。

2. 漂流あるいは亡命

- 江戸で学んでいた新島は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の抄訳（『漂流記事』）、中国で出版された地理書『聯邦志略』を読み、国外の世界に強い憧れを持った。さらに漢文で書かれた聖書の解説書と出会うことにより、新たな希望を抱くようになった。
- ワイルド・ローヴァー号の船上で、香港で購入した漢訳聖書を読み進めた新島は、宗教的回心を経験する（鶴見俊輔「新島襄―大洋上の思索」1965 年）。それは武士の子から近代的自由人へというアイデンティティの変化であった。
- 『広辞苑』第2版には「亡命」の意味として「①戸籍を脱して逃げうせること。また、その人。②政治上の原因で本国を脱出して他国に身を寄せること」という説明がある。鶴見俊輔は、国禁を犯して脱国した新島の状態は②の意味で「亡命」であったと指摘している（「亡命について」1979 年）。加えて、『広辞苑』には①の用例として万葉集の山上憶良の歌の一節「蓋しこれ山沢に亡命する民ならむか」が挙げられており、晩年の新島が繰り返し言及

した「深山大沢」を思い起こさせる。

3. アーモストでの経験

- ニューイングランドにおいて新島は主にキリスト教神学と自然科学を学んだ。このころ、それまで世界の創造主としての神の存在や意図を明らかにするために行われていた自然の探究（自然神学）が、啓蒙主義の発展や産業革命を経て、人間の普遍的な利益を求める近代的な科学へと変貌していた。
- ただしアーモストでは未だ自然科学と宗教が強く結びついていた。たとえば新島の親しんだエドワード・ヒチコック（1793–1864）の教科書には、地質学によって明らかにされる自然の成り立ちが聖書『創世記』の天地創造の記述と一致するという主張が述べられている。新島は、脱国前に漢訳聖書で読んだ宇宙創造の物語、すなわち世界が神によって創造されたという思いを確かなものにしたであろう。
- 同時に、マサチューセッツ州やその周辺で鉱山開発や土木工事の現場に親しんだ新島にとって、地質学や鉱物学は文明社会の発展のために有用な学問でもあった。新島は、欧米の科学技術を日本に伝えることが、日本の国を発展させる道だと考えた。同様に，新島が暮らしたアーモストの市民社会の経験も，同志社の設立構想に影響を与えた可能性がある。

4. 明治維新への反応

- 新島にとって、明治維新後の日本政府との関わりは岩倉使節団との遭遇によって始まった。このとき、新島は臣下としての立場を取らず、自己の責任と意思に基づいた契約によって田中不二麿の教育調査に協力した。
- アメリカ国内とヨーロッパの教育事情の調査に随行した新島は、大学や福祉施設、病院などの公的な施設が市民によって、私立の形で設立・運営されていることを知った。
- 高等教育に関しては、ベルリン大学の創立（1810 年）を契機として教育と研究を一体化させた近代国家建設のための大学改革がアメリカに波及し、伝統的なカレッジに理工学、農学、医学などの専門課程や大学院が開設されていた。
- このような状況を体験した新島は、日本への帰国を決意した。それはアメリカン・ボードの準宣教師としてであり、ヴァーモント州ラットランドでの演説は日本にキリスト教の教育機関を作るための援助を求めるものであった。しかし、実際の新島の構想は、キリスト教の徳育を基本とする英学の教育に始まり、さらに欧米の総合大学を範とする私立大学の設立を目指すものであった。

上述の内容に含まれる「同志社前史」と現在の同志社の繋がりは次のように要約される。

- 幼少期～青年期に中国古典を学ぶ → 日本の精神的伝統とキリスト教の関係づけ
- サムライの子から近代的自由人へのアイデンティティの変化 → 真誠の自由
- アーモストでの生活（近代市民社会の基盤としてのコミュニティ経験） → 同志社という結社
- アーモスト大学での学び → リベラルアーツ（自由教育）、私学
- 米欧の教育視察 → 専門大学としての同志社大学
- ラットランド演説 → キリスト教主義

このように「同志社精神」の萌芽となる新島の経験を振り返ることには、もちろん根本的な意義がある。ただし、忘れてならないのは、同志社の私学開業願に記されたもう一人の「結社人」山本覚馬（1828–1892）や「教員履歴」

が示された J. D. Davis（1838−1910）の存在である。さらに新島八重（1845–1932）や D. W. Learned（1848–1943）などを含め、新島とともにあって初期の同志社を支えた多様な人たちの経験や思想も、同志社の精神史のルーツを構成していることを付言したい。

■公開シンポジウム「同志社草創期はどのような時代であったのか――新島襄の挑戦」
（連続シンポジウム「同志社 150 年の歴史から展望する未来への挑戦」第２回）
日時：6 月 3 日（月）17:00～19:00
場所：同志社礼拝堂 ＆ Zoom ウェビナー
講師：沖田行司（同志社大学名誉教授、びわこ学院大学学長）
司会：小原克博（神学部教授、良心学研究センター長）
コメンテーター：
　　澤田瞳子（小説家）、玉井史絵（グローバル・コミュニケーション学部教授）
詳細は、https://ryoshin.doshisha.ac.jp/jp/activity/20240603/

■良心学研究センターの刊行物
『良心を考えるために』2017 年、増補改訂版 2018 年。
『良心学入門』岩波書店、2018 年（本体 1,500 円＋税）。
『新島襄 365』2019 年（Amazon Kindle 版あり）。
『良心から科学を考える――パンデミック時代への視座』岩波書店、2021 年（本体 1,600 円＋税）。
『パンデミック時代における良心』2021 年（Amazon Kindle 版あり）。
『同志社精神を考えるために』2023 年（Amazon Kindle 版あり）。
Joseph Hardy Neesima and the Doshisha Spirit, 2023.